
気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について

1.これまでの審議経過について

気候変動を踏まえた今後の治水対策の進め方に関するこれまでの審議経過

- 大阪府では気候変動の影響を踏まえた今後の治水対策について、令和4年度から審議を実施
- 令和6年度には、大阪府域では将来的に降雨量が1.15倍(2°C上昇時)に増大する可能性があることが確認されたため、令和7年度からは具体的な「基本高水流量の算出方法」や「治水手法設定にあたっての考え方」について審議を進めている

年度	審議会・部会	主な議題
R4	審議会①	【諮問】気候変動を踏まえた今後の治水対策の進め方について
R5	部 会①	● 実績降雨の分析と治水対策の検討の進め方
	部 会②	● 将来的な降雨量、流量の増大を想定した場合の治水対策の進め方の検討
	審議会②	【中間とりまとめ】気候変動を踏まえた今後の治水対策の進め方について
R6	部 会③	● 気候変動を踏まえた大阪府域の降雨分析について
	部 会④	● 降雨分析の結果に基づく大阪府域河川における流量等の分析について
	審議会③	【答申】気候変動を踏まえた今後の治水の進め方について
R7	審議会① (R7.6.4)	【諮問】気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について
	部 会① (R7.9.16)	● 気候変動を踏まえた基本高水の変更の考え方について
	部 会② (R8.1.23)	● 気候変動を踏まえたピーク流量の算出方法について
	審議会② (R8.2.2予定)	【中間とりまとめ】 大阪府域における気候変動を踏まえた基本高水の算出方法について

今回部会

令和7年度第1回治水専門部会における審議内容について

- 令和7年度第1回治水専門部会(R7.9.16)においては、基本高水算出にあたっての基本的な考え方について、下記のとおり審議いただいた。
- 第2回ではこれらの考え方を基に具体的な河川におけるピーク流量の算出フローについて審議いただきたい。

【論点】

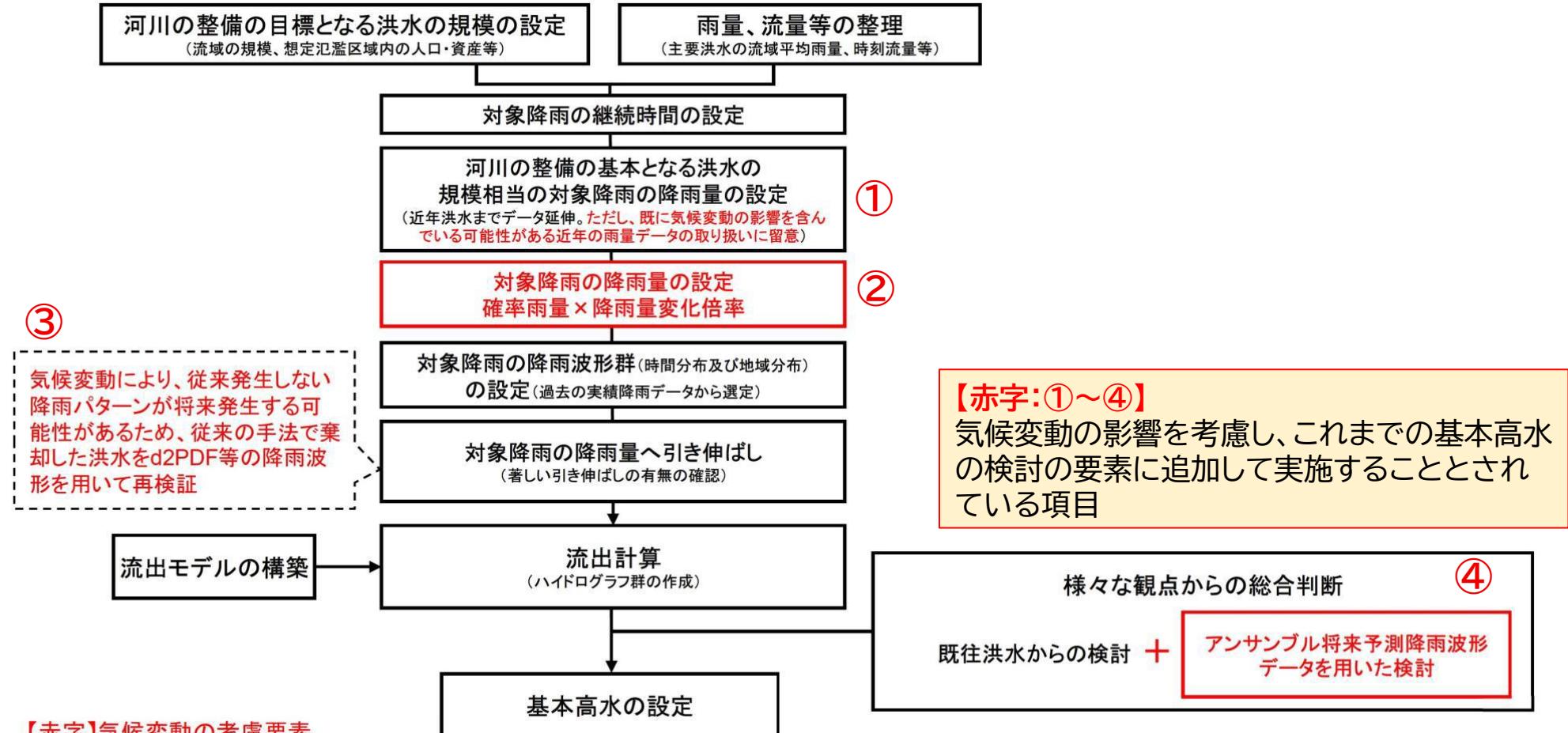
『気候変動を考慮した基本高水の変更の考え方について』

- ① 流出計算手法の見直しについて
 - 時間、空間分布を反映することが出来る流出モデルを採用することを基本とする
- ② 流域治水の発想に基づき土木学会で言及されている「流域水収支図」の取り扱い方
 - 各流域にある水田やため池、グラウンド等の流域が持つ治水効果のある施設の調査を行い、流域の持つポテンシャル(流域賦存量)の確認を実施する
- ③ 気候変動進展のスピードに対応していくため、今後の治水計画立案にあたり「流域基本高水」の考え方を導入するか否か
 - ①で見直しを行った流出モデルを用いて算出した流量に対し、②で確認を行った流域賦存量を基に、流域の状況等を踏まえ、各団体や施設で取り組むべき数値を流域基本高水や基本高水として提示する

2. 気候変動を踏まえたピーク流量の設定方法について

気候変動を踏まえた基本高水設定の流れ（社会資本整備審議会 河川分科会）

- 国の社会資本整備審議会 河川分科会では、「河川整備基本方針の変更の考え方について、以下のフローに基づいて、気候変動の影響を、基本高水の設定プロセスに取り入れる」事とし、河川整備基本方針検討小委員会にて審議を行っている



出典：社会資本整備審議会 河川分科会河川整備基本方針検討小委員会(第151回) 参考資料 河川整備基本方針の変更の考え方について

気候変動を踏まえたピーク流量の算出にあたり論点となる事項と対応(案)

- 気候変動を踏まえた基本高水流量の算出にあたっては、「河川整備基本方針検討小委員会(国土交通省 水管理・国土保全局)」で実施されている検討手法を踏襲することを基本とする。
- その前提の上で、府独自の論点とその対応(案)を以下の通りとしたピーク流量の算出フローを設定する。

【大阪府で実施する際の論点】

(1) ピーク流量検討にあたり検討対象とする降雨について

- 「大阪府の計画降雨」の100年確率降雨×1.15に加え、D2PDFで得られた将来実験降雨および過去の主要な実績降雨を対象とする。
- また、流域面積が50km²を超えるような流域の場合には、空間分布の影響を算出フローに加える。

(2) ピーク流量算出にあたり流出計算モデルの設定等について

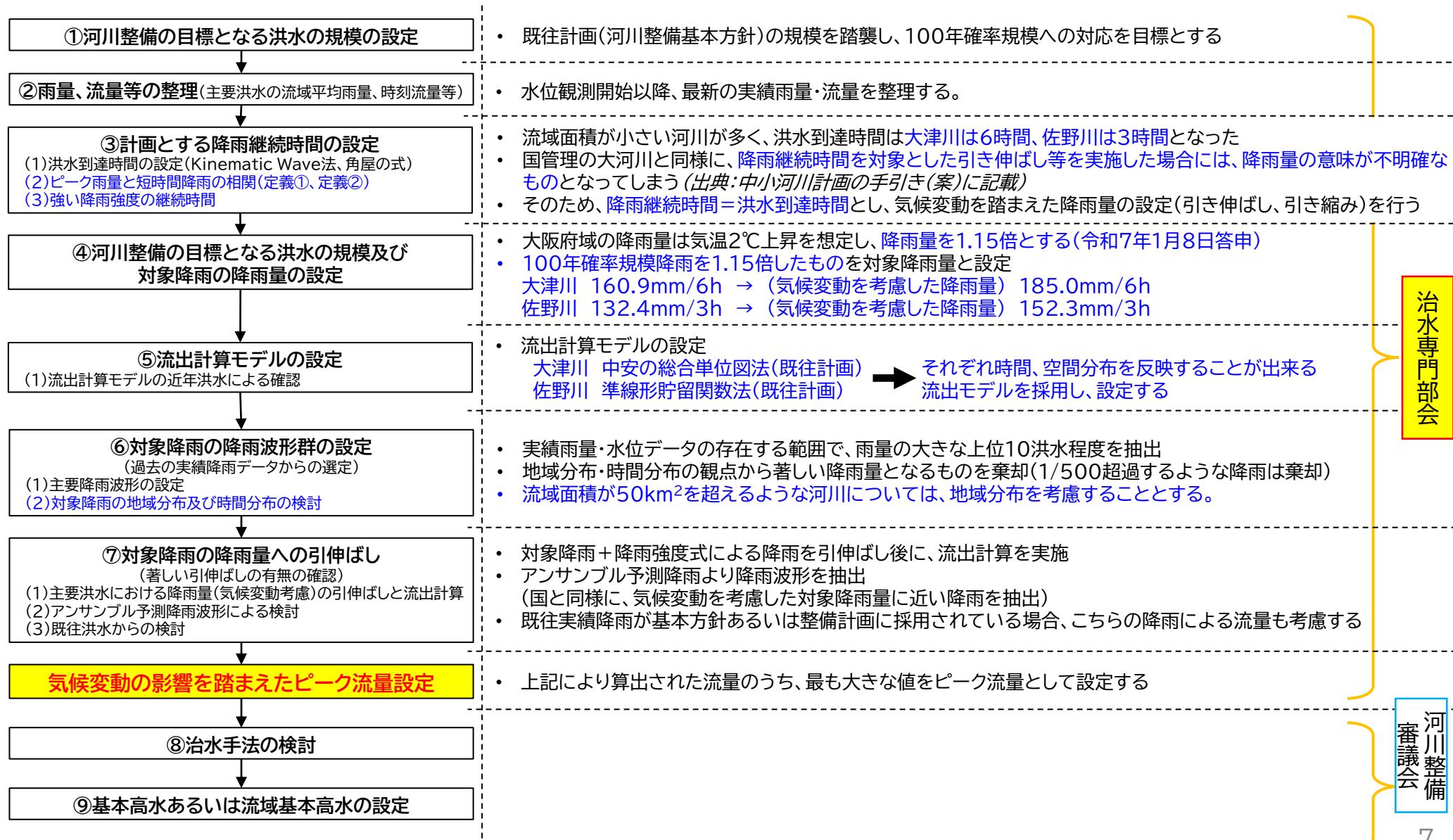
- 時間、空間分布を反映することが出来る流出モデルを採用する。
- 出発水位についても気候変動の影響があるものと想定されるため、治水計画立案の際には、海面上昇等を考慮する。

(3) ピーク流量設定にあたって目標とする水準について

- 後述するピーク流量算出フローによって算出された流量の最大値をピーク流量とする。
- なお、モデルの変更等により、これまで目標とし、整備を進めている流量が、ピーク流量より大きな値となつた場合には、気候変動の影響の不確実さを踏まえ、引き続き、現整備目標の数字を採用することを基本とする。

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー

○ 国における基本高水検討の流れを踏まえ、府管理河川におけるピーク流量の算出フローを以下のとおり設定する。



気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー

～①河川整備の目標となる洪水の規模の設定～ ～②雨量、流量等の整理～

作業① 河川整備の目標となる洪水の規模の設定

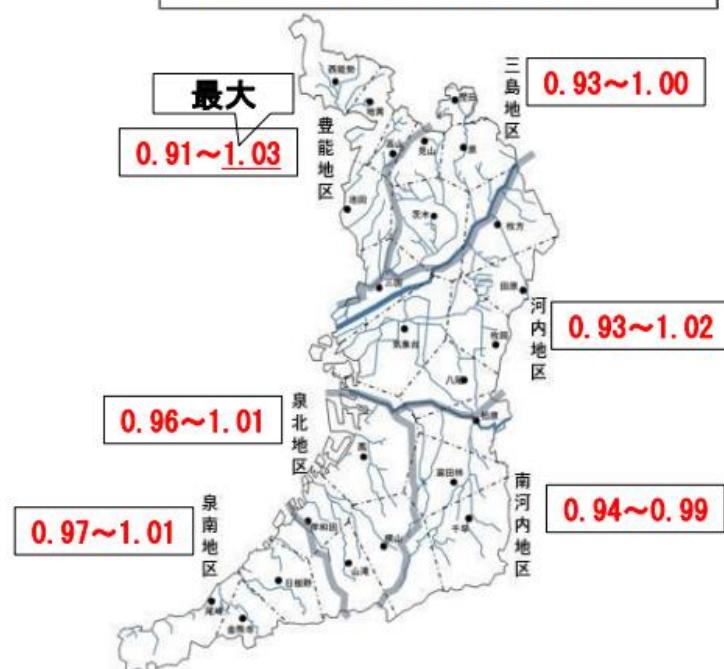
- 本府では、計画対象降雨を確率雨量(1/100)とし、降雨強度式を使用している。
- 今後の検討を進めていく気候変動の影響を踏まえた治水計画においても、確率雨量(1/100) × 1.15を対象とする。

作業② 雨量、流量等の整理

- 本府では、先述のとおり計画対象降雨を確率雨量(1/100)とし、降雨強度式を使用しているため、最新の実績雨量を整理し降雨強度式の妥当性について検証を実施したところ、現行の降雨強度式(S21～H7)と直近までのデータ(S21～R4)を比較した結果、確率雨量に大きな変動が無いことが確認した。
- そこで、気候変動の影響が顕在化していない期間で整理した現行の強度式(S21～H7)を用いる。
(R6.1.10 大阪府河川整備審議会にて審議)
- また過去実績降雨等についても最新の実績雨量を整理する。
(詳細は後述)

■各地区における確率雨量の変化率([S21～R4]/[S21～H7])
確率雨量は各地区12ケース※を算定し比較
※降雨継続時間(1、3、24hr) × 確率年(10、30、100、200年)

府域の平均変化倍率はH7からR4で**0.98倍**



出典:令和5年度第5回 大阪府 河川整備審議会資料より抜粋

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~③計画とする降雨継続時間の設定~

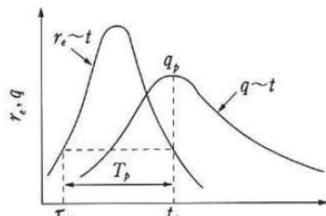
○「Kinematic Wave法」および「角屋の式」による洪水到達時間の推定、ピーク流量と短時間雨量との相関、強度の強い降雨の継続時間から総合的に判断を行い、**大津川では計画とする降雨継続時間を6時間として設定**

Kinematic Wave法及び角屋の式による洪水到達時間の検討

■Kinematic Wave法による洪水到達時間は大津川(樋並橋)で2時間～7時間(平均3.6時間)と推定。

■角屋の式による洪水到達時間は大津川(樋並橋)で4.3時間～6.3時間(平均5.2時間)と推定。

・Kinematic Wave法：矩形斜面上の表面流にKinematic Wave理論を適用して洪水到達時間を導く手法。実績のハイエトとハイドロを用いて、ピーク流量生起時刻以前の雨量がピーク流量生起時刻(t_p)の雨量と同じになる時刻(τ_p)により $T_p = t_p - \tau_p$ として推定



T_p : 洪水到達時間
 t_p : ピーク流量を発生する特性曲線の上流端での出発時刻
 τ_p : その特性曲線の下流端への到達時刻
 r_e : t_p ～ τ_p 間の平均有効降雨強度
 q_p : ピーク流量

・角屋の式：Kinematic Wave理論の洪水到達時間を表す式に、河道長と地形則を考慮した式

$$T_p = CA \cdot r_e$$

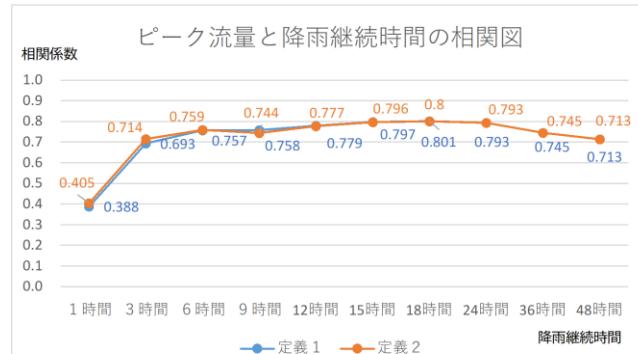
T_p : 洪水到達時間 (min)	A : 流域面積 (km ²)	丘陵山林地流域	$C=290$
r_e : 時間当たり雨量 (mm/h)	放牧地・ゴルフ場	$C=190 \sim 210$	
C : 流域特性を表す係数	粗造成宅地	$C=90 \sim 120$	
	市街化地域	$C=60 \sim 90$	

No.	洪水発生年月日	ピーク流量		kinematic Wave法 算定結果 (hr)	平均有効降雨強度 (mm/hr)	角屋式 算定結果 (hr)
		流量 m ³ /s	生起時刻			
1	H19.7.17	455.3	2007/7/17 2:00	4	26.8	4.4
2	H20.5.25	276.0	2008/5/25 6:00	4	16.3	5.2
3	H21.10.8	302.7	2009/10/8 6:00	2	9.5	6.3
4	H23.9.4	440.1	2011/9/4 1:00	5	18.6	5.0
5	H24.6.22	515.2	2012/6/22 2:00	3	28.1	4.3
6	H25.9.16	495.9	2013/9/16 8:00	7	10.9	6.0
7	H26.8.9	452.2	2014/8/9 12:00	4	18.1	5.0
8	H29.10.22	486.4	2017/10/22 21:00	2	18.8	5.0
9	H30.7.6	224.0	2018/7/6 8:00	2	10.9	6.0
10	R5.6.2	410.6	2023/6/2 14:00	3	21.0	4.8

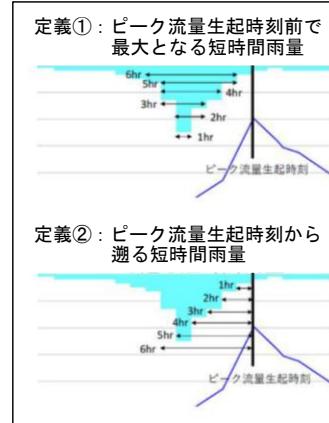
基準地点 高津(樋並橋)における主要10洪水を対象

ピーク流量と短時間雨量との相関関係

■ピーク流量との相関係数は6時間から高い値を示している。

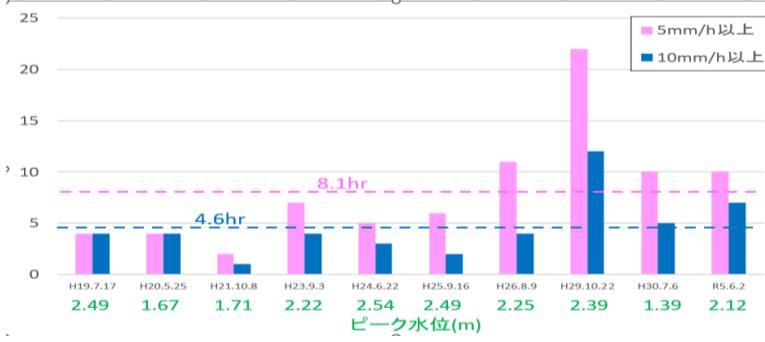


基準地点 高津(樋並橋)における主要洪水を対象
(H16.3～R7.4:約22年分)



強度の強い降雨の継続時間の検討

■実績洪水における降雨継続時間は、5mm/h以上では平均8時間、10mm/h以上では平均5時間となる。



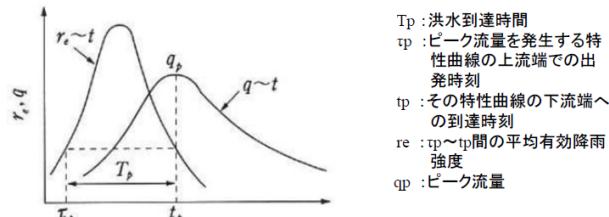
基準地点 高津(樋並橋)における主要洪水を対象

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~③計画とする降雨継続時間の設定~

○「Kinematic Wave法」および「角屋の式」による洪水到達時間の推定、ピーク流量と短時間雨量との相関、強度の強い降雨の継続時間から総合的に判断を行い、佐野川では計画とする降雨継続時間を3時間として設定

Kinematic Wave法及び角屋の式による洪水到達時間の検討

- Kinematic Wave法による洪水到達時間は佐野川(佐野川橋)で2時間～16時間(平均5.2時間)と推定。
- 角屋の式による洪水到達時間は佐野川(佐野川橋)で2.4時間～4.2時間(平均2.8時間)と推定。
 - ・Kinematic Wave法: 矩形斜面上の表面流にKinematic Wave理論を適用して洪水到達時間を導く手法。実績のハイエトとハイドロを用いて、ピーク流量生起時刻以前の雨量がピーク流量生起時刻(t_p)の雨量と同じになる時刻(τ_p)により $T_p = t_p - \tau_p$ として推定



- ・角屋の式：Kinematic Wave理論の洪水到達時間を表す式に、河道長と地形則を考慮した式

$$T_p = CA \cdot r_e$$

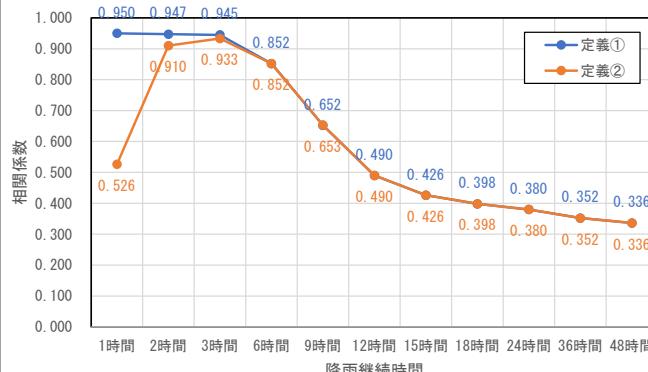
T_p : 洪水到達時間 (min)	丘陵山林地流域	C=290
A : 流域面積 (km ²)	放牧地・ゴルフ場	C=190～210
r _e : 時間当たり雨量 (mm/h)	粗造成宅地	C=90～120
C : 流域特性を表す係数	市街化地域	C=60～90

No.	洪水発生年月日	ピーク流量		Kinematic Wave法 算定結果	角屋式	
		流量 (m ³ /s)	生起時刻		平均有効降雨強度 (mm/hr)	算定結果 (hr)
1	H16. 11. 11	69. 6	2004/11/12 4:00	3	20. 9	2. 8
2	H19. 7. 16	104. 3	2007/7/17 2:00	4	31. 7	2. 4
3	H21. 11. 10	66. 2	2009/11/11 7:00	6	19. 0	2. 9
4	H23. 9. 3	70. 7	2011/9/3 23:00	3	31. 4	2. 4
5	H24. 6. 21	89. 8	2012/6/22 2:00	3	27. 9	2. 5
6	H25. 9. 15	36. 0	2013/9/16 5:00	16	18. 8	2. 9
7	H26. 10. 13	101. 6	2014/10/13 20:00	2	29. 6	2. 4
8	H29. 10. 22	56. 8	2017/10/22 23:00	8	24. 7	2. 6
9	H30. 7. 6	50. 0	2018/7/6 2:00	3	24. 4	2. 6
10	R1. 10. 12	12. 9	2019/10/12 9:00	4	6. 5	4. 2

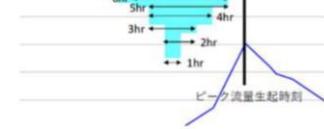
基準地点(佐野川橋)における主要10洪水を対象

ピーク流量と短時間雨量との相関関係

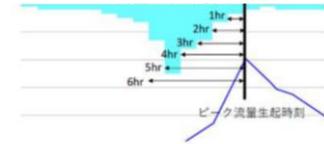
- ピーク流量との相関係数は2～6時間で高い値を示している。



定義①：ピーク流量生起時刻前で最大となる短時間雨量



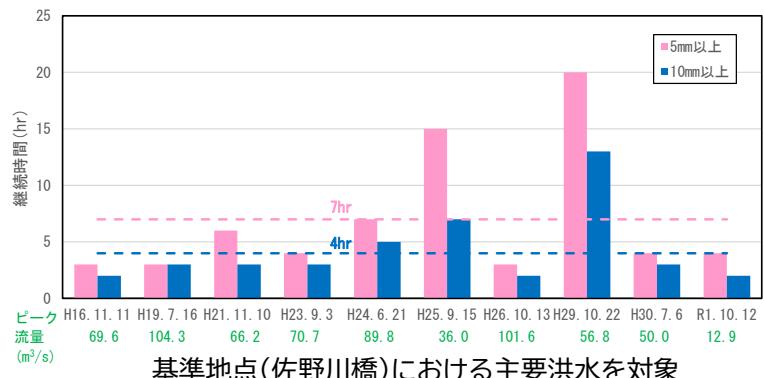
定義②：ピーク流量生起時刻から遡る短時間雨量



基準地点(佐野川橋)における主要洪水を対象
(H16.3～R7.4:約22年分)

強度の強い降雨の継続時間の検討

- 実績洪水における降雨継続時間は、5mm/h以上では平均7時間、10mm/h以上では平均4時間となる。



基準地点(佐野川橋)における主要洪水を対象

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー

～④河川整備の目標となる洪水の規模及び対象降雨の降雨量の設定～

- 大阪府域の降雨量は気温2°C上昇を想定し、降雨量を1.15倍とする。(令和7年1月8日答申)
- 大阪府降雨強度式より 160.9mm/6h → (気候変動考慮) 185.1mm/6h

河川の整備の目標となる洪水の規模

■計画規模は既定計画(河川整備基本方針)と同様の1/100とする。

対象降雨の降雨量の設定

■泉北地区における100年確率における降雨量は、計画とする降雨継続時間を6時間(360分)とした場合、
160.9mm/6hとなることから、気候変動を考慮した降雨量は185.1mmとする。

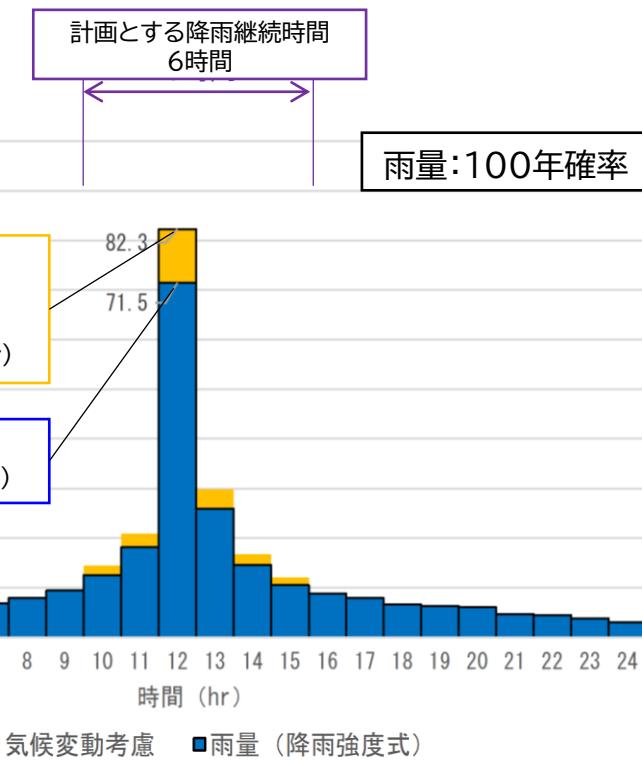
1/100確率規模 降雨量

項目	降雨量	備考
1/100 確率降雨量	160.9mm/6h	大阪府降雨強度式(H8.3)
気候変動を考慮した降雨量	185.1mm/6h	160.9mm/6h × 降雨変更倍率1.15

確率年	6時間 (360分)						降雨強度式 $I = a / (\sqrt{t} + b)^{-n}$	a 60分以内	b 60分以上	n
	10	30	60	120	1440	日雨量				
2年	12.1	22.2	30.8	39.9	47.1	62.6	95.1	84.3	1,240	3.027
	72.8	44.4	30.8	20.0	15.7	10.4	4.0			1.555
5年	15.3	28.8	41.7	54.8	65.4	88.9	139.1	123.1	483	1.278
	91.8	57.5	41.7	27.4	21.8	14.8	5.8			1.114
10年	17.4	33.1	48.9	64.6	77.5	106.3	168.2	148.8	386	0.698
	104.3	66.2	48.9	32.3	25.8	17.7	7.0			1.014
15年	18.6	35.5	52.9	70.2	84.4	116.2	184.7	163.3	360	0.463
	111.4	71.1	52.9	35.1	28.1	19.4	7.7			0.910
20年	19.4	37.2	55.8	74.1	89.2	123.0	196.2	173.4	347	0.326
	116.3	74.5	55.8	37.0	29.7	20.5	8.2			0.876
30年	26.5	39.6	59.8	79.5	95.9	132.7	212.2	187.6	336	0.161
	123.2	79.3	59.8	39.8	32.0	22.1	8.8			0.835
40年	21.4	41.3	62.6	83.4	100.6	139.4	223.6	197.6	331	0.061
	128.1	82.6	62.6	41.7	33.5	23.2	9.3			0.810
50年	22.0	42.6	64.7	86.3	104.2	144.7	232.3	205.3	328	-0.008
	131.9	85.3	64.7	43.2	34.7	24.1	9.7			0.793
60年	22.5	43.7	66.5	88.7	107.2	149.0	235.5	211.6	326	-0.061
	135.0	87.4	66.5	44.4	35.7	24.8	10.0			0.780
70年	22.9	44.6	68.0	90.8	109.7	152.6	245.5	216.9	325	-0.103
	137.6	89.2	68.0	45.4	36.6	25.4	10.2			0.769
80年	23.3	45.4	69.3	92.5	111.9	155.7	250.7	221.5	325	-0.137
	139.8	90.7	69.3	46.3	37.3	25.9	10.4			0.761
90年	23.6	46.0	70.4	94.1	113.8	158.4	255.3	225.6	324	-0.166
	141.8	92.1	70.4	47.0	37.9	26.7	10.6			0.754
100年	24.7	47.5	71.5	95.5	115.5	160.9	259.4	229.2	324	-0.191
	93.3	71.5	71.5	47.7	38.5	26.8	10.8			0.748
150年	25.1	49.0	75.4	100.8	122.1	170.3	275.2	243.2	324	-0.279
	150.4	98.0	75.4	50.4	40.7	28.4	11.5			0.726
200年	25.9	50.7	78.1	104.6	126.8	170.0	286.4	253.0	325	-0.335
	155.2	101.4	78.1	52.3	42.3	29.5	11.9			0.712
300年	27.0	53.0	82.0	109.9	133.3	186.5	302.2	266.9	327	-0.406
	162.0	106.1	82.0	55.0	44.4	31.1	12.6			0.694
400年	27.8	54.7	84.8	113.7	138.0	193.2	313.4	276.8	330	-0.452
	168.8	109.4	84.8	56.9	46.0	32.2	13.1			0.683
500年	28.4	56.0	87.0	116.6	141.6	198.4	322.0	284.4	331	-0.485
	170.5	112.0	87.0	58.3	47.4	33.1	13.4			0.675

上段: 確率雨量(mm)、下段: 降雨強度(mm/hr)

大阪府(泉北地区)確率年別降雨強度



気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー

～④河川整備の目標となる洪水の規模及び対象降雨の降雨量の設定～

- 大阪府域の降雨量は気温2°C上昇を想定し、降雨量を1.15倍とする。(令和7年1月8日答申)
- 大阪府降雨強度式より **132.4mm/3h → (気候変動考慮) 152.3mm/3h**

河川の整備の目標となる洪水の規模

■計画規模は既定計画(河川整備基本方針)と同様の1/100とする。

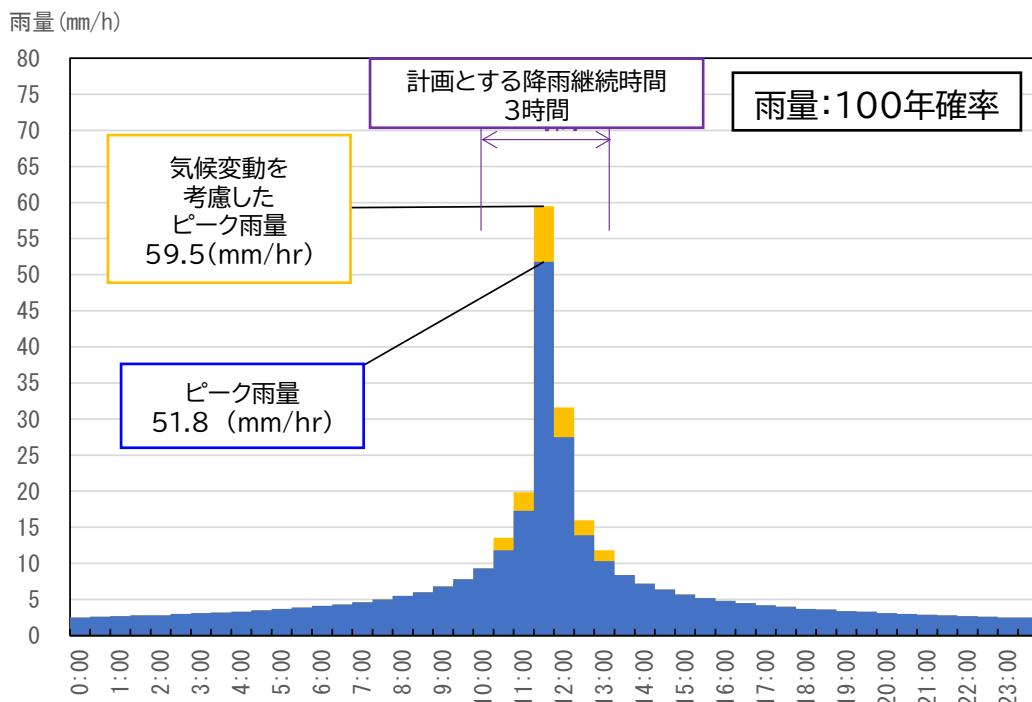
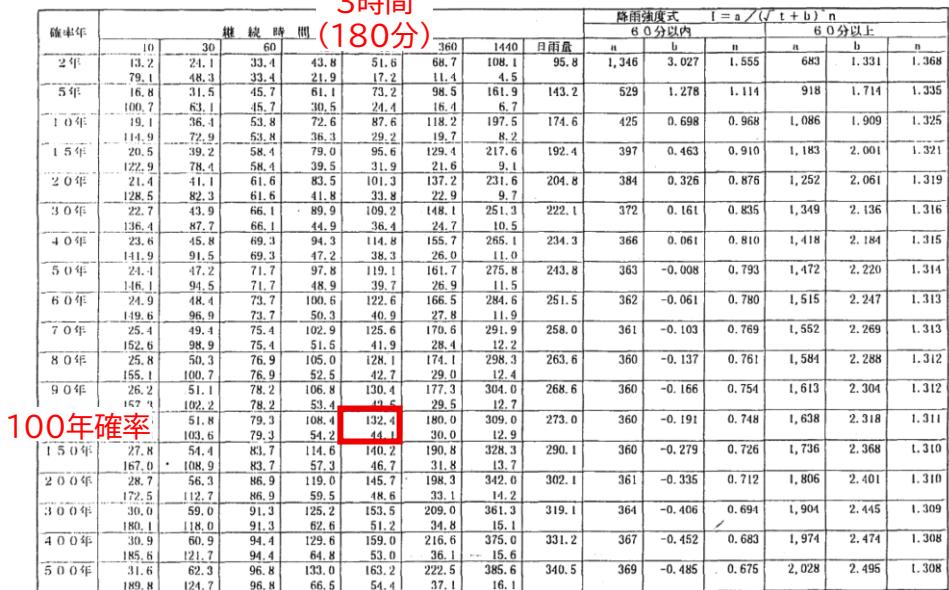
対象降雨の降雨量の設定

■泉南地区における100年確率における降雨量は、計画とする降雨継続時間を3時間(180分)とした場合、
132.4mm/3hとなることから、気候変動を考慮した降雨量は152.3mmとする。

1/100確率規模 降雨量

項目	降雨量	備考
1/100 確率降雨量	132.4mm/3h	大阪府降雨強度式(H8.3)
気候変動を考慮した降雨量	152.3mm/3h	132.4mm/3h × 降雨変更倍率1.15

3時間
(180分)



引伸ばし雨量(1/100確率降雨(降雨強度式)の場合)

※30分ごとの雨量として作成

上段：確率雨量(mm)、下段：降雨強度(mm/hr)

大阪府(泉南地区)確率年別降雨強度

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー～⑤流出計算モデルの設定～

- 時間、空間分布を反映することが出来、かつより詳細に流域対策の取り組みをモデルへと組込むことが出来るRRIモデルを選定することを基本とする

	合理式	合成合理式法	貯留関数法	等価粗度法 (Kinematic Wave)	準線形 貯留型モデル	タンクモデル	土研分布モデル (RRIモデル)
概要	流域を一つの箱として扱い、ピーク降雨強度 × 流域面積 × 流出係数／単位時間によりピーク流量を算定	複数のピーク流出を合理式で時差をつけて重ねることで、洪水ハイドログラフを得る手法	流域を「貯留体」とみなし、流入量と流出量の関係を関数で表現して洪水流出を計算する手法	流域を斜面と河道に分け、マニング式で流出を表し、粗度係数を調整して洪水ハイドログラフを再現する手法	洪水流出を「貯留量と流出量の関係」に基づき表現する概念モデル。非線形性を簡略化し計算の安定性を確保するために「準線形化」する手法	降雨流出過程を複数のタンクで表現する概念モデル。降雨は最上段タンクに入り、各タンクの側面孔から流出した水の合計河川流量とする手法	流域に降った雨が河川に集まる現象、洪水が河川を流下する現象、河川を流れる水が氾濫原に溢れる現象を流域一体で予測するモデル
降雨の時間・空間分布	ピーク流量を求める手法であり検討不可	空間は流域分割方法に依存する	時間は可能だが、空間は平均化される	時間は可能だが、空間は平均化される	時間は可能だが、空間は平均化される	時間は可能だが、空間は平均化される	降雨の時間・空間差を詳細に反映できる
	×	△	○	○	○	○	◎
流域対策の表現	調節施設は計算不可	係数調整によるもので、機構によらない	施設対策をパラメータとして表現	施設対策をパラメータとして表現	施設対策をパラメータとして表現	施設対策をモデル構造として表現	施設対策をモデル構造として表現
	×	△	○	○	○	○	○
流域対策の空間分布	上記理由により本評価では対象外とする	係数調整によるもので、機構によらない	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	様々な対策をメッシュ単位で空間的に配置させることが可能
	—	△	○	○	○	○	◎
土地利用変化への対応	上記理由により本評価では対象外とする	係数調整によるもので、機構によらない	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	土地利用の状況や変更を詳細に更新可能
	—	△	○	○	○	○	◎
実績洪水以上の洪水への対応	上記理由により本評価では対象外とする	係数調整によるもので、機構によらない	非線形項や物理的関係(抵抗・貯留)に基づき反映が可能	非線形項や物理的関係(抵抗・貯留)に基づき反映が可能	非線形項や物理的関係(抵抗・貯留)に基づき反映が可能	非線形項や物理的関係(抵抗・貯留)に基づき反映が可能	越流・氾濫の非線形現象を含め、物理過程として反映が可能
	—	△	△	△	△	△	○
選定	流域対策の組み込みや効果、土地利用状況を詳細に表現が出来ることからRRIモデルを選定する。						◎

【凡例】

×:不可 △:工夫次第で可能 ○:可能 ◎:より詳細な反映が可能

気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑥対象降雨の降雨波形群の設定~

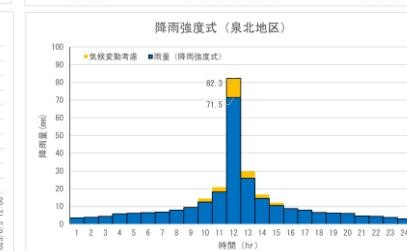
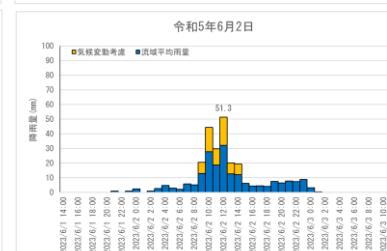
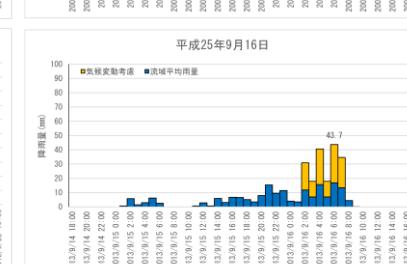
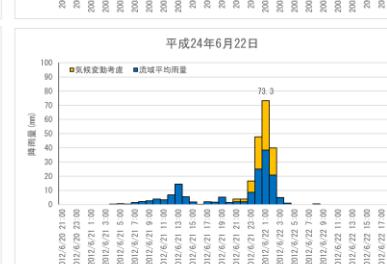
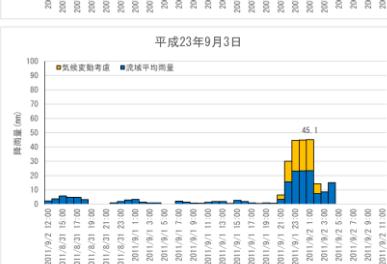
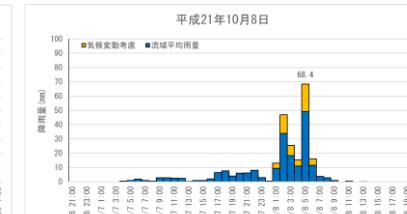
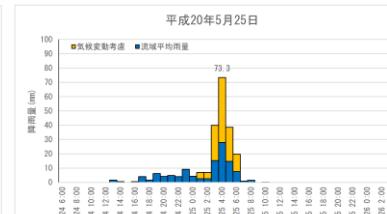
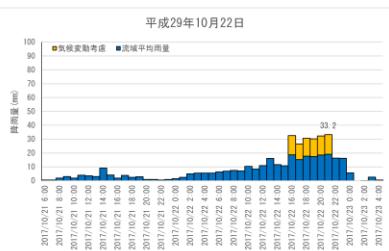
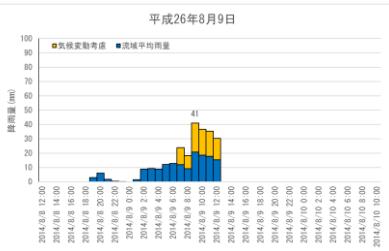
- 過去の実績降雨データから上位10洪水程度を抽出
- 抽出された実績降雨の確率が1/500を超過しているような場合、国では棄却している。しかしながら、大阪府降雨強度式では1/500降雨量が大きくなっていたため、時間分布に関しては、棄却は発生しなかった。

対象降雨の降雨量の設定主要降雨波形の設定、対象降雨の地域分布及び時間分布の検討

- 大津川における水位観測が開始された平成16年(2004年)3月以降の過去洪水のうち、重要な10洪水を実績降雨として選定した。
- 上記上用を引伸ばした結果、大阪府降雨強度式より算定した500年確率雨量をその降雨も超過しないため、時間分布による洪水の棄却は行わない。

引伸ばし雨量
(主要10洪水 + 降雨強度式雨量)

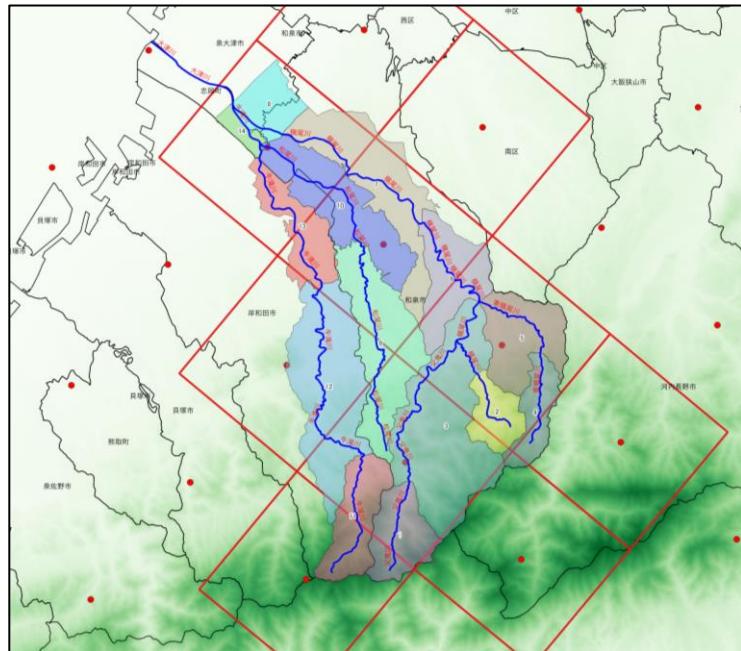
No.	洪水発生年月日	降雨量		降雨量(1/100)		気候変動考慮		拡大率	備考
		1時間 (mm/hr)	6時間 (mm/6hr)	1時間 (mm/hr)	6時間 (mm/6hr)	1時間 (mm/hr)	6時間 (mm/6hr)		
1	平成19年07月17日	34.6	107.4	42.8	133.0	59.7	185.1	1.723	
2	平成20年05月25日	27.9	70.5	52.6	133.0	73.3	185.1	2.626	
3	平成21年10月08日	18.8	50.9	49.1	133.0	68.4	185.1	3.637	
4	平成23年09月03日	23.4	96.1	32.4	133.0	45.1	185.1	1.926	
5	平成24年06月22日	38.4	97.0	52.7	133.0	73.3	185.1	1.908	
6	平成25年09月16日	16.9	71.7	31.3	133.0	43.7	185.1	2.582	
7	平成26年08月09日	20.7	93.5	29.4	133.0	41.0	185.1	1.980	
8	平成29年10月22日	19.1	106.7	23.8	133.0	33.2	185.1	1.735	
9	平成30年07月06日	19.4	88.4	29.2	133.0	40.7	185.1	2.094	
10	令和05年06月02日	32.2	116.4	36.8	133.0	51.3	185.1	1.590	
11	大阪府降雨強度式	71.5	160.9	71.5	160.9	82.3	185.1	1.150	
棄却値	1/500大阪府降雨強度式					87.0	198.4		



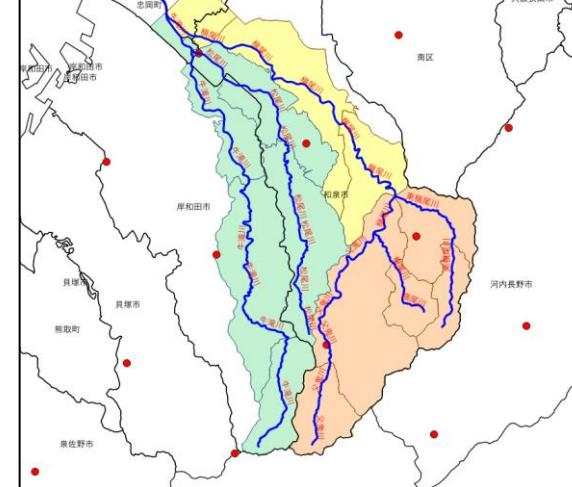
気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑥対象降雨の降雨波形群の設定~

- 大津川流域は流域面積が 102.2km^2 であり、 50km^2 を超えていたため、地域分布を考慮することとする。
- 大津川流域を3流域(牛滝川流域、槇尾川上流域、槇尾川下流域)に分割し、地域分布が与える影響について確認を行う

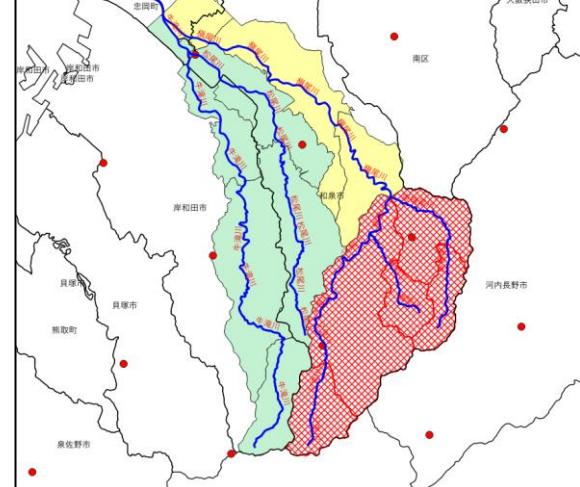
大津川水系の小流域(■:標高)



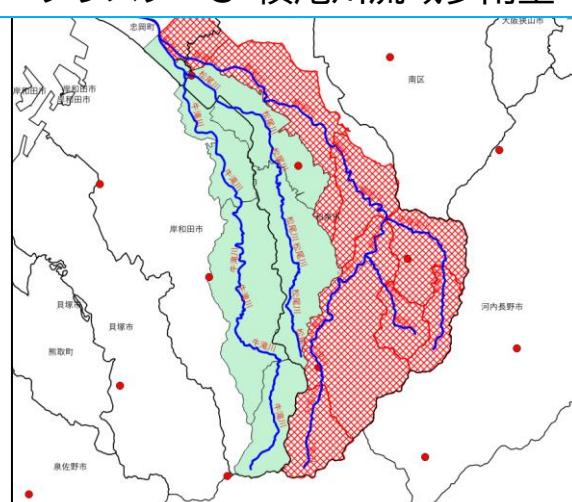
クラスター1:均質降雨型



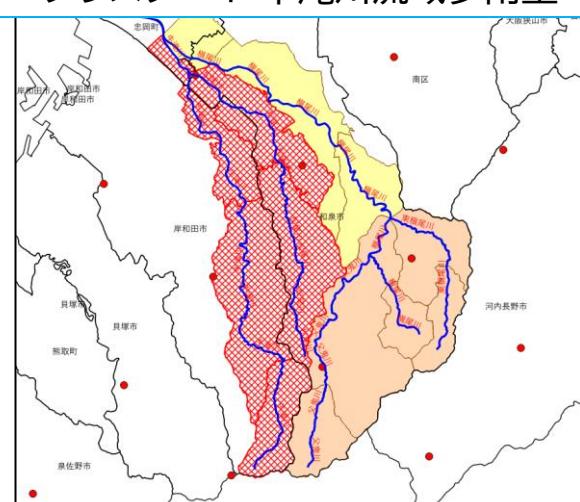
クラスター2:槇尾川上流域多雨型



クラスター3:槇尾川流域多雨型



クラスター4:牛滝川流域多雨型



気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー～⑥対象降雨の降雨波形群の設定～

佐野川

- 過去の実績降雨データから上位10洪水程度を抽出
 - 抽出された実績降雨の確率が1/500を超過しているような場合等の降雨を国では棄却している。しかしながら、大阪府降雨強度式では1/500降雨量が大きくなつており、棄却は発生しない。ただし、拡大率が著しい降雨については、自然現象として生起しえないと考えられるため棄却する。

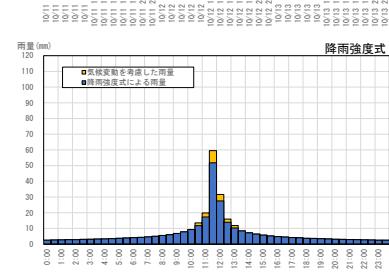
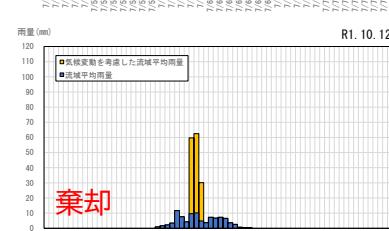
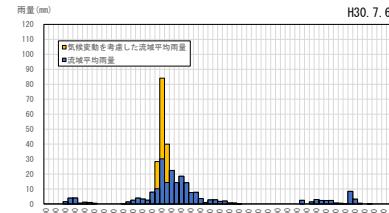
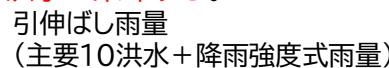
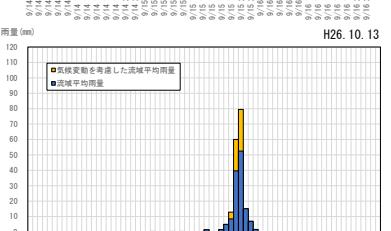
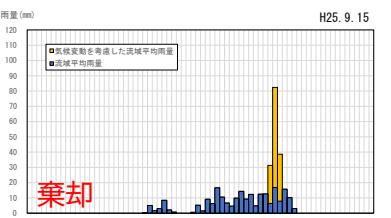
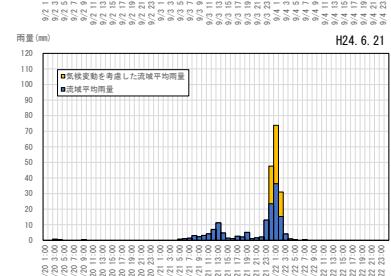
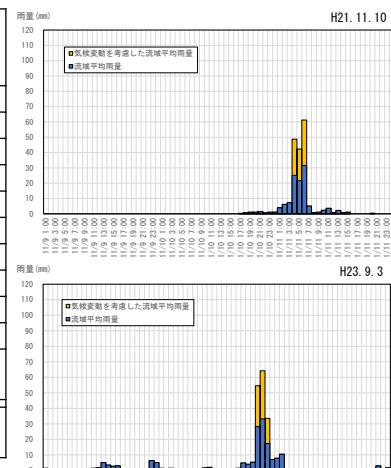
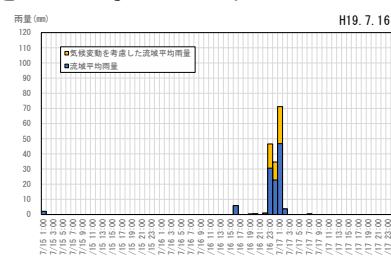
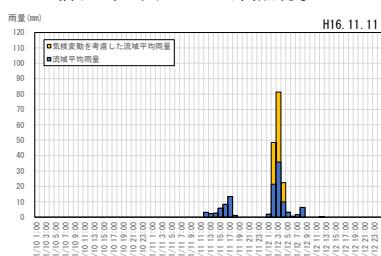
対象降雨の降雨量の設定主要降雨波形の設定、対象降雨の地域分布及び時間分布の検討

- 佐野川における水位観測が開始された平成16年(2004年)3月以降の過去洪水のうち、主要な10洪水を実績降雨として選定した。
 - 上記を引伸ばした結果、大阪府降雨強度式より算定した500年確率雨量をどの降雨も超過しないため、時間分布による洪水の棄却は発生しない。
(アンサンブル将来予測降雨を用いた「対象降雨の継続時間内雨量に対する短時間雨量の比率」についても確認したが、洪水の棄却は発生しない。)
 - ただし、拡大率が3.0を超えるような洪水については、著しい引伸ばしであり、自然現象として生起されないと考え、該当する2洪水を棄却する。

主要洪水引伸ばし雨量

No.	洪水発生年月日	降雨量		気候変動考慮		拡大率(3時間)	備考
		1時間 (mm/h)	3時間 (mm/3h)	1時間 (mm/h)	3時間 (mm/3h)		
1	H16.11.11	35.8	67.1	81.3	152.3	2.27	
2	H19.7.16	46.8	100.1	71.2	152.3	1.52	
3	H21.11.10	31.5	78.4	61.3	152.3	1.94	
4	H23.9.3	33.2	78.8	64.2	152.3	1.93	
5	H24.6.21	36.4	75.1	73.8	152.3	2.03	
6	H25.9.15	16.8	31.1	82.4	152.3	4.90	棄却(理由※1)
7	H26.10.13	52.5	100.6	79.5	152.3	1.51	
8	H29.10.22	22.1	56.3	59.8	152.3	2.70	
9	H30.7.6	30.1	54.6	84.1	152.3	2.79	
10	R1.10.12	11.7	24.7	62.5	152.3	6.16	棄却(理由※1)
11	大阪府降雨強度式	79.3	132.6	91.1	152.3	1.15	
棄却値	1/500大阪府降雨強度式			96.8	163.2	3.00	

*1:棄却した降雨は全体雨量としては大きい降雨ではあるが、短時間雨量が小さく、拡大率(3.0倍以上)が大きくなり、自然現象として「生起されないと考えられる」ため



気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑦対象降雨の降雨量への引伸ばし~

佐野川

- 泉南地域の降雨強度式および作業⑥にて抽出した過去実績降雨に対し引伸ばしを実施
- 更にアンサンブル予測降雨から、様々な降雨波形を抽出

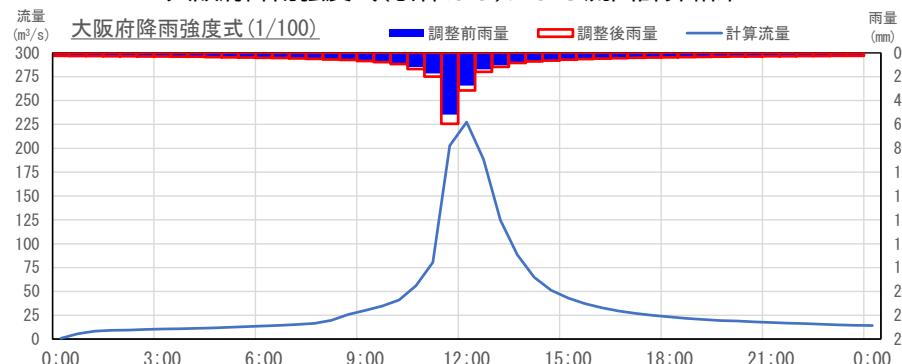
主要洪水における降雨量(気候変動考慮)の引伸ばしと流出計算

■大阪府降雨強度式および実績降雨(10洪水)の降雨を引伸ばし

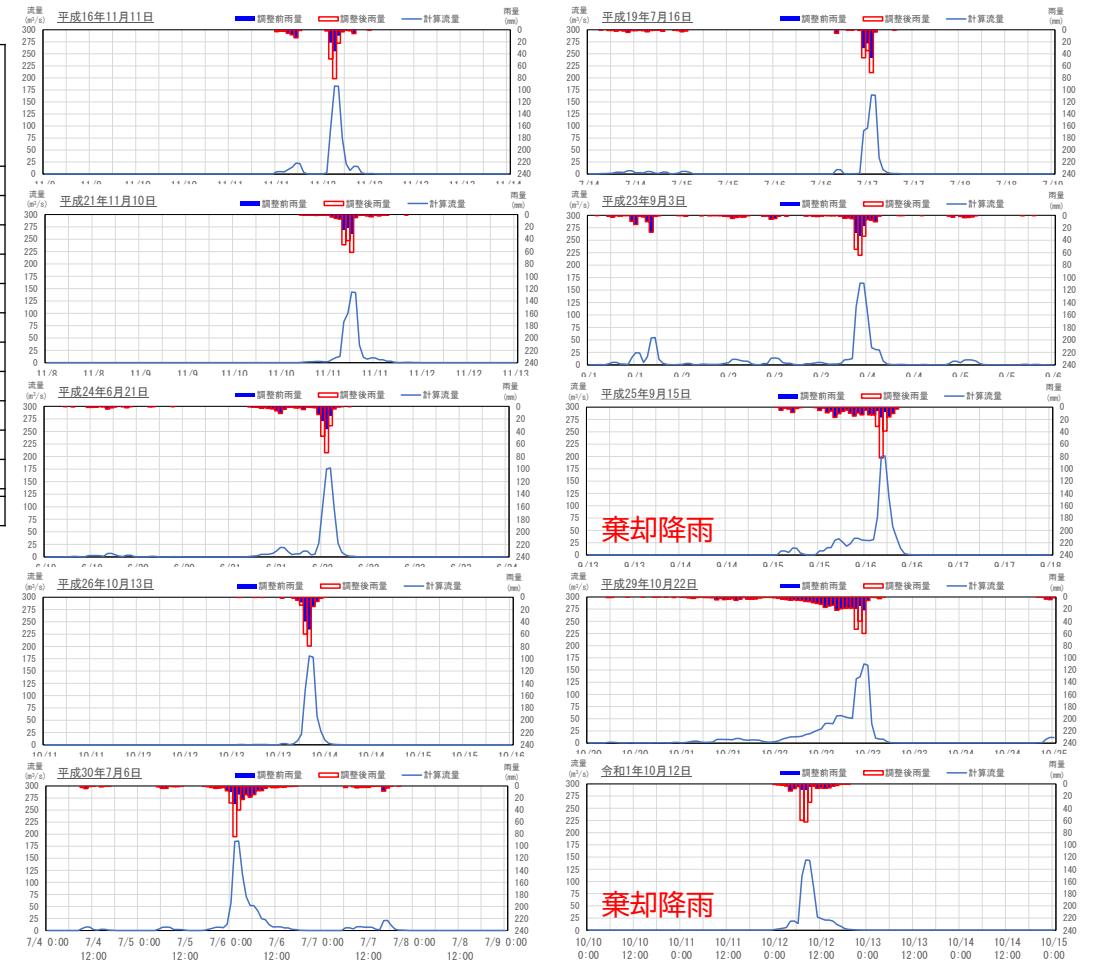
抽出した実績降雨

No.	洪水発生年月日	降雨量		気候変動考慮		拡大率 (3時間)	ピーク流量 [気候変動考慮] (m ³ /s)	備考
		1時間 (mm/h)	3時間 (mm/3h)	1時間 (mm/h)	3時間 (mm/3h)			
1	H16.11.11	35.8	67.1	81.3	152.3	2.27	182.9	
2	H19.7.16	46.8	100.1	71.2	152.3	1.52	164.3	
3	H21.11.10	31.5	78.4	61.3	152.3	1.94	142.9	
4	H23.9.3	33.2	78.8	64.2	152.3	1.93	164.1	
5	H24.6.21	36.4	75.1	73.8	152.3	2.03	177.3	
6	H25.9.15	16.8	31.1	82.4	152.3	4.90	201.1	棄却降雨
7	H26.10.13	52.5	100.6	79.5	152.3	1.51	180.6	
8	H29.10.22	22.1	56.3	59.8	152.3	2.70	162.6	
9	H30.7.6	30.1	54.6	84.1	152.3	2.79	185.7	
10	R1.10.12	11.7	24.7	62.5	152.3	6.16	144.1	棄却降雨
11	大阪府降雨強度式	79.3	132.6	91.1	152.3	1.15	227.6	
棄却値		1/500大阪府降雨強度式		96.8	163.2	3.00		

大阪府降雨強度式(引伸ばし)による流出計算結果



実績降雨(引伸ばし)による流出計算結果



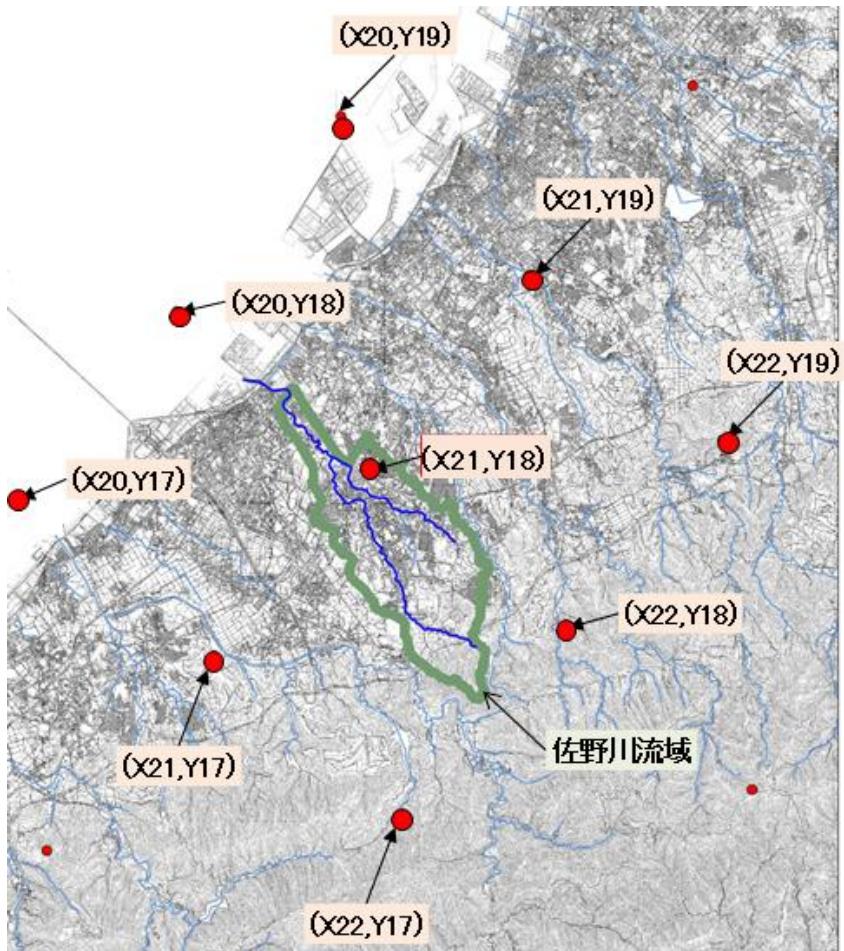
気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑦対象降雨の降雨量への引伸ばし~

- 泉南地域の降雨強度式および作業⑥にて抽出した過去実績降雨降雨に加え、アンサンブル予測降雨から様々な降雨波形を抽出

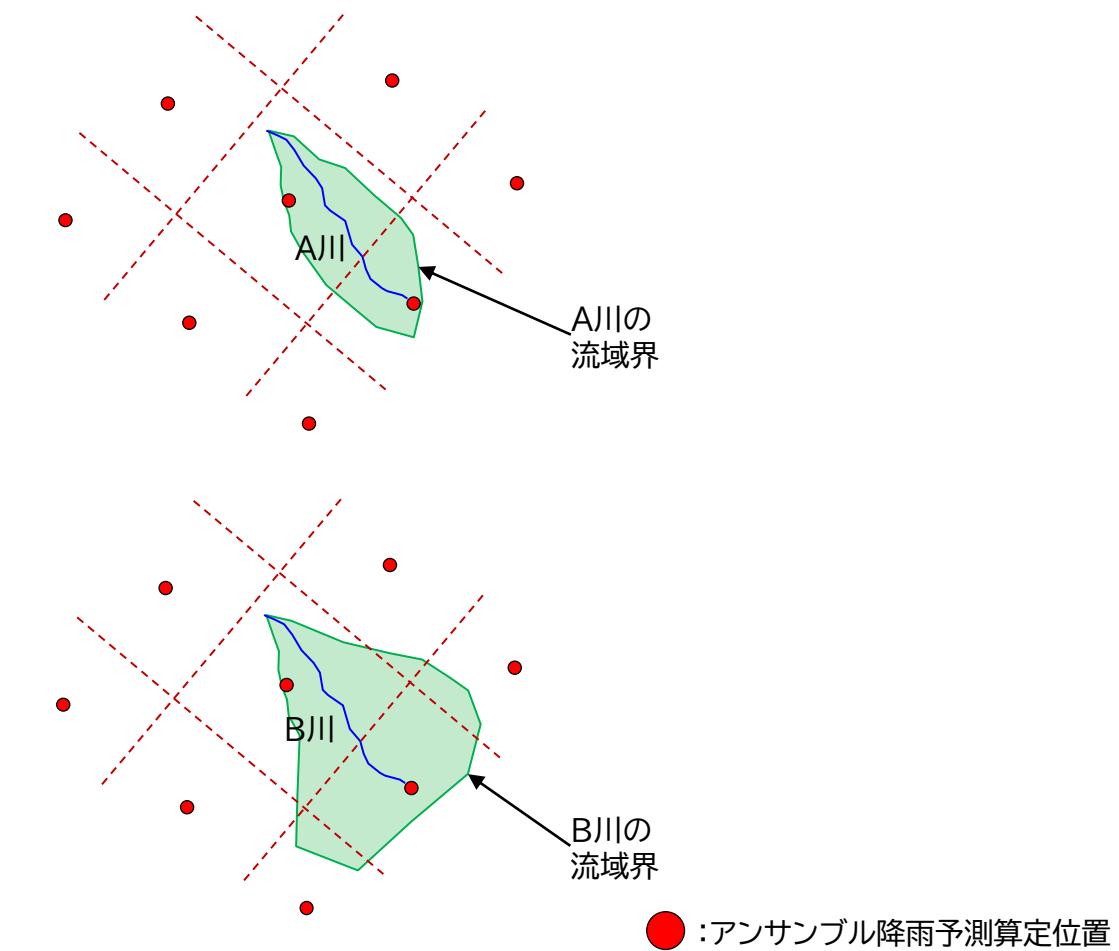
主要洪水における降雨量(気候変動考慮)の引伸ばしと流出計算

- 各メッシュに含まれる流域面積で按分し、流域平均雨量を作成する

<佐野川流域の場合>



<アンサンブル降雨予測算定位置と流域の関係について(イメージ)>



気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑦対象降雨の降雨量への引伸ばし~

アンサンブル予測降雨波形による検討

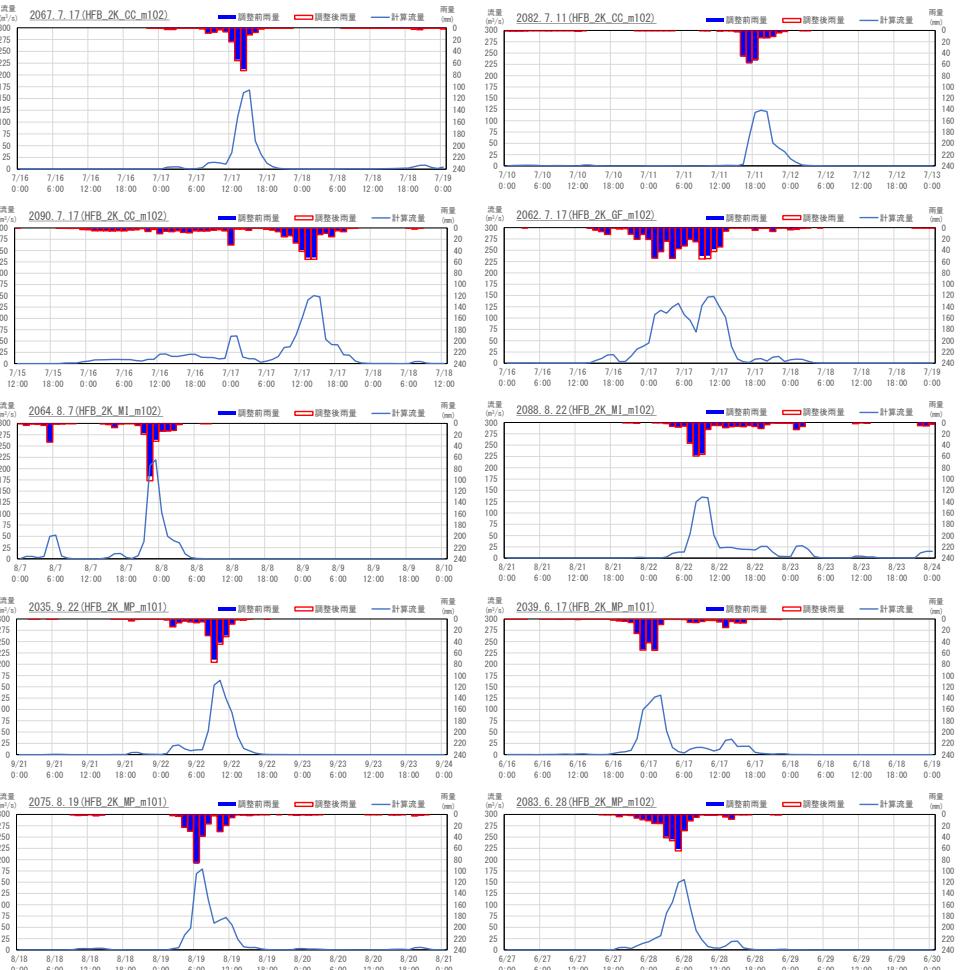
- d2PDF(将来360年)の確認を行い、佐野川流域に該当する地点を抽出した。
- また、著しい引き伸ばし等によって降雨波形を歪めることができないよう、計画対象降雨の降雨量近傍の洪水(計画対象降雨の降雨量(152.3mm/3h)に近い±10%の範囲内)を抽出した。
- 抽出した降雨波形は、中央集中や複数の降雨ピークがある波形等、様々なタイプの降雨波形を含んでいることを確認した。

抽出したアンサンブル将来予測降雨

予測パターン	洪水	総雨量(mm)	降雨継続時間(hr)	時間雨量	3時間雨量	気候変動後1/100雨量(mm/3h)	拡大率	ピーク流量(m³/s)
				最大(mm/h)	最大(mm/3h)			
気温2°C上昇								
HFB_2K_CC_m102	2067/7/17	207.4	25	70.28	147.24	152.3	1.03	167.9
	2082/7/11	204.5	12	58.38	157.96		0.96	123.2
	2090/7/17	426.5	51	52.44	143.88		1.06	150.4
HFB_2K_GF_m102	2062/7/17	583.4	38	54.37	138.05		1.10	147.7
HFB_2K_MI_m102	2064/8/7	196.3	14	93.68	140.37	152.3	1.08	219.5
	2088/8/22	275.9	26	58.06	148.96		1.02	135.1
HFB_2K_MP_m101	2035/9/22	233.2	24	71.81	143.01	152.3	1.06	164.3
	2039/6/17	269.9	41	54.48	150.02		1.02	131.7
	2075/8/19	263.4	17	87.18	157.15		0.97	179.2
HFB_2K_MP_m102	2083/6/28	271.1	26	61.27	144.76	152.3	1.05	155.7
	2088/7/12	440.6	39	64.04	160.86		0.95	149.0
HFB_2K_MR_m101	2071/8/11	289.2	19	72.12	144.64		1.05	163.4

※拡大率:「3時間雨量」と「計画降雨量」との比率

抽出したアンサンブル予測降雨波形(12洪水)

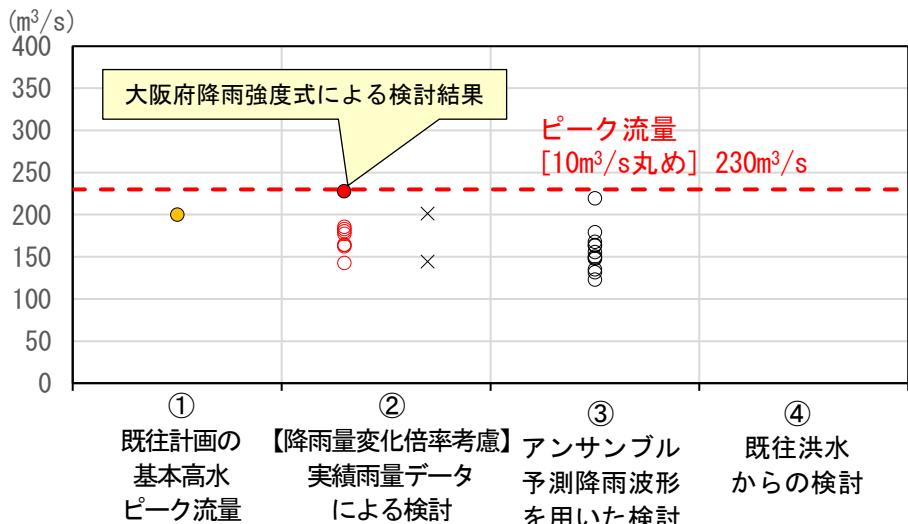


気候変動を踏まえたピーク流量の設定フロー ~⑦対象降雨の降雨量への引伸ばし~

- 参考値ではあるが、既往の流出モデル(準線形貯留関数法)におけるピーク流量を算出したところ、佐野川水系におけるピーク流量は、 $230\text{m}^3/\text{s}$ となり、既往計画より $30\text{m}^3/\text{s}$ 増加することになった。
- 今後は、流出モデルの更新作業を行ったのち算出された流量を基に治水手法の検討を進めていく。

基本高水の設定に係る総合的判断(佐野川(佐野川橋地点))

■下記に示す通り、大阪府降雨強度式における設定(100年確率降雨×1.15倍)が最大値を示す。

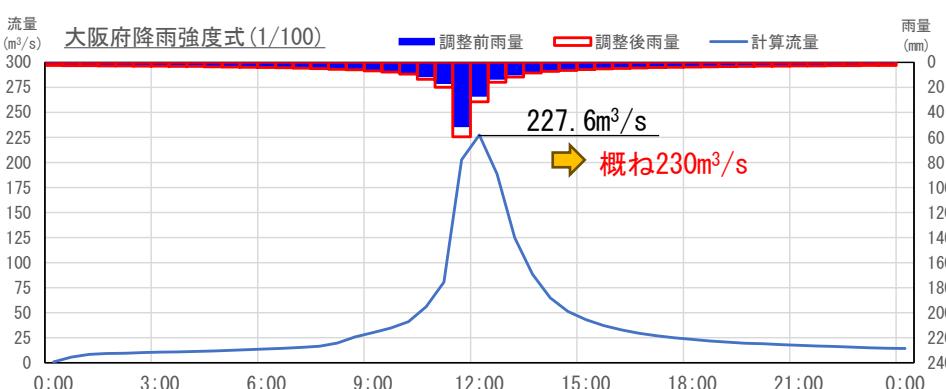


【凡例】

- 既往の基本方針における基本高水ピーク流量
- 実績雨量データによる検討:
降雨量変化倍率(2°C 上昇時の降雨量の変化倍率1.15倍)を考慮した検討【大阪府降雨強度式による検討含む】
×:短時間または小流域で著しい引き伸ばしとなっている降雨
- アンサンブル予測降雨波形を用いた検討:
気候変動予測モデルによる将来気候(2°C 上昇)のアンサンブル降雨波形【対象降雨の降雨量($152.3\text{mm}/3\text{h}$)の±10%に含まれる洪水】
- 既往洪水からの検討
過去実績降雨を計画降雨としている場合に確認を実施

基本高水の設定に向けた洪水波形の設定

■引き伸ばし後の降雨波形を用いて算定したピーク流量が最大となる大阪府降雨強度式(中央集中型)がもっとも適切と考えられる。



(注)本検討にあたって使用した流出モデルは過去採用されていたものであり、今後これらの流量には変更が生じる可能性がある

3. 気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について (中間とりまとめ)

気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について(中間とりまとめ)

(1) ピーク流量検討にあたり検討対象とする降雨について

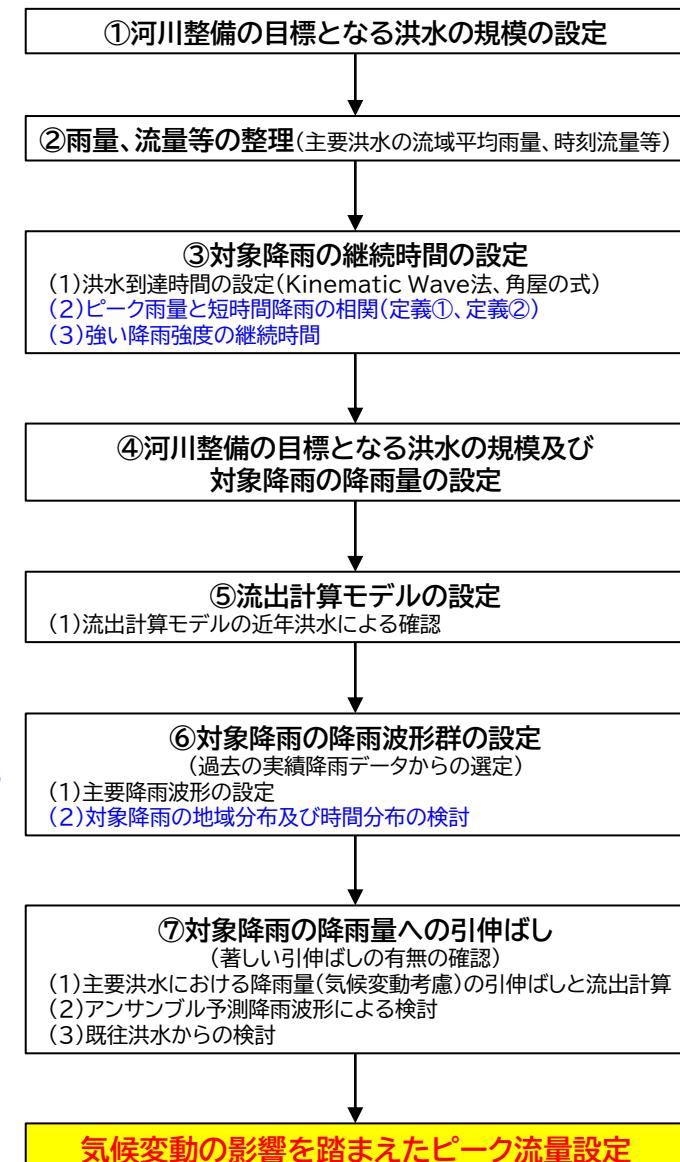
- 「大阪府の計画降雨」の100年確率降雨×1.15に加え、D2PDFで得られた将来実験降雨および過去の主要な実績降雨を対象とする。
- また、流域面積が50km²を超えるような流域の場合には、空間分布の影響を算出フローに加える。

(2) ピーク流量算出にあたり流出計算モデルの設定等について

- 時間、空間分布を反映することが出来る流出モデルを採用する。
- 出発水位についても気候変動の影響があるものと想定されるため、治水計画立案の際には、海面上昇等を考慮する。

(3) ピーク流量設定にあたって目標とする水準について

- 右記のピーク流量算出フローによって算出された流量の最大値をピーク流量とする。
- なお、モデルの変更等により、これまで目標とし、整備を進めている流量が、ピーク流量より大きな値となった場合には、気候変動の影響の不確実さを踏まえ、引き続き、現整備目標の数字を採用することを基本とする。



大阪府河川整備審議会 令和7年度 第2回 治水専門部会【資料】の修正について

- 大阪府河川整備審議会 令和7年度 第2回 治水専門部会【資料】におきまして、委員の意見を受けて、以下のとおり修正を行いました。

	修正前	修正後																																																																																																																
ページ	13ページ	13ページ																																																																																																																
修正箇所	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>合成式法</th><th>貯留開散法</th><th>等価蓄水法 (Kinematic Wave)</th><th>準線形 貯留型モデル</th><th>タンクモデル</th><th>土砂分離モデル (RRIモデル)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>概要</td><td>複数のピーク流出を合成式法で差異をつけて表現することによって、洪水ハイドログラフを得る手法。</td><td>流域を「貯留体」とみなし、洪水量と蓄水量の関係を開散で表現して洪水流出を計算する手法。</td><td>洪水流出を「貯留蓄水」と定義し、粗面係数を用いて洪水流出を計算して洪水ハイドログラフを再現する手法。</td><td>降雨が出現する複数のタククで表現する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。</td><td>流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現する手法。</td></tr> <tr> <td>長所</td><td>簡易なハイドログラフが作成できる。 ピーク流量と時間差を算出する精度良好で再現できる。 都市市小河川の洪水波形の推定に適している。</td><td>治水対策を行った場合の調節機能の組込みが容易である。 降雨時間と時間差を考慮して扱える。</td><td>流域の斜面と河川に分割し、流出減少を簡略化して扱える。</td><td>タクク内の水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。</td><td>流域内に水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。</td></tr> <tr> <td>短所</td><td>流域構造が大きい場合、誤差が大きくなる。 貯留機能が弱い。 従来実験降雨に対する適合度が大きくない。</td><td>定数について本学理論に基づく算出を行ったが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。</td><td>流域を複数にしたが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。</td><td>流域の洪水位線を直接表現できず、流域の定数は流域の物理特性と直接対応しないため、物理モデルとは異なる。</td><td>治水対策を行うための流域構造の組み込みが複雑。</td></tr> <tr> <td>通用容易さ</td><td>◎</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>◎</td><td>△～○</td></tr> <tr> <td>再現性</td><td>△～○</td><td>△～○</td><td>○</td><td>○</td><td>△～○</td><td>○</td></tr> <tr> <td>適用性</td><td>都市市小河川、数十km²以下</td><td>中規模流域、数十km²～数百km²</td><td>急勾配流域</td><td>中～小規模流域、数km²～数百km²</td><td>中～広域流域、数十km²～数万km²</td><td>○</td></tr> <tr> <td>測定</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>◎</td></tr> </tbody> </table> <p>(流出モデルの比較表を修正)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>合理式</th><th>合成式法</th><th>貯留開散法</th><th>等価蓄水法 (Kinematic Wave)</th><th>準線形 貯留型モデル</th><th>タンクモデル</th><th>土砂分離モデル (RRIモデル)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>概要</td><td>流域を「貯留体」とみなし、ピーク流量と時間差を算出する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。</td><td>流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。</td><td>流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。</td></tr> <tr> <td>降雨の時間・空間分布</td><td>×</td><td>△</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr> <tr> <td>流域対象の表現</td><td>×</td><td>△</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr> <tr> <td>流域対象の空間分布</td><td>上記理由により本評価では対象外とする</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>様々な対象をメッシュ単位で空間的に配置されること可能</td></tr> <tr> <td>土地利用変化への対応</td><td>-</td><td>△</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr> <tr> <td>実験洪水以上の洪水への対応</td><td>上記理由により本評価では対象外とする</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>流域分割や粗度分布により設定</td><td>土地利用の状況や変更を詳細に反映可能</td></tr> <tr> <td>選定</td><td>流域対象の組み込みや効果、土地利用状況を詳細に表現が出来ることからRRIモデルを選定する。</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>◎</td></tr> </tbody> </table>		合成式法	貯留開散法	等価蓄水法 (Kinematic Wave)	準線形 貯留型モデル	タンクモデル	土砂分離モデル (RRIモデル)	概要	複数のピーク流出を合成式法で差異をつけて表現することによって、洪水ハイドログラフを得る手法。	流域を「貯留体」とみなし、洪水量と蓄水量の関係を開散で表現して洪水流出を計算する手法。	洪水流出を「貯留蓄水」と定義し、粗面係数を用いて洪水流出を計算して洪水ハイドログラフを再現する手法。	降雨が出現する複数のタククで表現する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現する手法。	長所	簡易なハイドログラフが作成できる。 ピーク流量と時間差を算出する精度良好で再現できる。 都市市小河川の洪水波形の推定に適している。	治水対策を行った場合の調節機能の組込みが容易である。 降雨時間と時間差を考慮して扱える。	流域の斜面と河川に分割し、流出減少を簡略化して扱える。	タクク内の水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。	流域内に水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。	短所	流域構造が大きい場合、誤差が大きくなる。 貯留機能が弱い。 従来実験降雨に対する適合度が大きくない。	定数について本学理論に基づく算出を行ったが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。	流域を複数にしたが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。	流域の洪水位線を直接表現できず、流域の定数は流域の物理特性と直接対応しないため、物理モデルとは異なる。	治水対策を行うための流域構造の組み込みが複雑。	通用容易さ	◎	○	○	○	◎	△～○	再現性	△～○	△～○	○	○	△～○	○	適用性	都市市小河川、数十km ² 以下	中規模流域、数十km ² ～数百km ²	急勾配流域	中～小規模流域、数km ² ～数百km ²	中～広域流域、数十km ² ～数万km ²	○	測定						◎		合理式	合成式法	貯留開散法	等価蓄水法 (Kinematic Wave)	準線形 貯留型モデル	タンクモデル	土砂分離モデル (RRIモデル)	概要	流域を「貯留体」とみなし、ピーク流量と時間差を算出する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。	降雨の時間・空間分布	×	△	○	○	○	○	○	流域対象の表現	×	△	○	○	○	○	○	流域対象の空間分布	上記理由により本評価では対象外とする	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	様々な対象をメッシュ単位で空間的に配置されること可能	土地利用変化への対応	-	△	○	○	○	○	○	実験洪水以上の洪水への対応	上記理由により本評価では対象外とする	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	土地利用の状況や変更を詳細に反映可能	選定	流域対象の組み込みや効果、土地利用状況を詳細に表現が出来ることからRRIモデルを選定する。						◎
	合成式法	貯留開散法	等価蓄水法 (Kinematic Wave)	準線形 貯留型モデル	タンクモデル	土砂分離モデル (RRIモデル)																																																																																																												
概要	複数のピーク流出を合成式法で差異をつけて表現することによって、洪水ハイドログラフを得る手法。	流域を「貯留体」とみなし、洪水量と蓄水量の関係を開散で表現して洪水流出を計算する手法。	洪水流出を「貯留蓄水」と定義し、粗面係数を用いて洪水流出を計算して洪水ハイドログラフを再現する手法。	降雨が出現する複数のタククで表現する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現する手法。																																																																																																													
長所	簡易なハイドログラフが作成できる。 ピーク流量と時間差を算出する精度良好で再現できる。 都市市小河川の洪水波形の推定に適している。	治水対策を行った場合の調節機能の組込みが容易である。 降雨時間と時間差を考慮して扱える。	流域の斜面と河川に分割し、流出減少を簡略化して扱える。	タクク内の水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。	流域内に水位変化で貯留作用をモデル化できたり、洪水ピークの低減やハイドログラフ形状の再現性が高い。																																																																																																													
短所	流域構造が大きい場合、誤差が大きくなる。 貯留機能が弱い。 従来実験降雨に対する適合度が大きくない。	定数について本学理論に基づく算出を行ったが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。	流域を複数にしたが、流域構造を大きくして流域を低下させているといった調整となる。	流域の洪水位線を直接表現できず、流域の定数は流域の物理特性と直接対応しないため、物理モデルとは異なる。	治水対策を行うための流域構造の組み込みが複雑。																																																																																																													
通用容易さ	◎	○	○	○	◎	△～○																																																																																																												
再現性	△～○	△～○	○	○	△～○	○																																																																																																												
適用性	都市市小河川、数十km ² 以下	中規模流域、数十km ² ～数百km ²	急勾配流域	中～小規模流域、数km ² ～数百km ²	中～広域流域、数十km ² ～数万km ²	○																																																																																																												
測定						◎																																																																																																												
	合理式	合成式法	貯留開散法	等価蓄水法 (Kinematic Wave)	準線形 貯留型モデル	タンクモデル	土砂分離モデル (RRIモデル)																																																																																																											
概要	流域を「貯留体」とみなし、ピーク流量と時間差を算出する概念モデル。降雨は最も段階的に表され、各タククの側面積を算出し、それを合計して洪水量を算出する手法。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。	流域に降った雨水が河川に集まる現象、洪水が河川に流下する現象、雨水を流れ出る現象を流域全体で表現するモデル。																																																																																																															
降雨の時間・空間分布	×	△	○	○	○	○	○																																																																																																											
流域対象の表現	×	△	○	○	○	○	○																																																																																																											
流域対象の空間分布	上記理由により本評価では対象外とする	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	様々な対象をメッシュ単位で空間的に配置されること可能																																																																																																											
土地利用変化への対応	-	△	○	○	○	○	○																																																																																																											
実験洪水以上の洪水への対応	上記理由により本評価では対象外とする	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	流域分割や粗度分布により設定	土地利用の状況や変更を詳細に反映可能																																																																																																											
選定	流域対象の組み込みや効果、土地利用状況を詳細に表現が出来ることからRRIモデルを選定する。						◎																																																																																																											
ページ	18ページ	18ページ																																																																																																																
修正箇所	<p>主要洪水における降雨量(気候変動考慮)の引伸ばしと流出計算</p> <p>■大阪府内の河川は流域が小さく、アンサンブル将来予測降雨の算出地点が、流域内に存在しない等の状況が考えられる。 そのため、下記に示す方法で使用する降雨予測地点の設定を行う。 佐野川においては、流域内に含まれているため、その中の1点の降雨波形を抽出する。</p> <p><アンサンブル降雨予測位置と流域の関係について></p> <p>①流域内に算定位置がない場合 流域から最も近傍のある位置のデータを流域平均雨量として使用する。</p> <p>②流域内に算定位置がある場合 流域内にある位置のデータを流域平均雨量として使用する。</p> <p>③流域内に2点以上算定位置がある場合 流域内に含まれる点のデータをティーセン分割し、流域平均雨量を作成する。</p> <p>▲: AIIの流域界 ●: アンサンブル降雨予測位置 ◆: 採用箇所 ●: アンサンブル降雨予測算定位置</p> <p><佐野川流域の場合></p> <p>流域内に1点のみ含まれているため、この(X21, Y18)の点における降雨波形を抽出</p>	<p>主要洪水における降雨量(気候変動考慮)の引伸ばしと流出計算</p> <p>■各メッシュに含まれる流域面積で按し、流域平均雨量を作成する</p> <p><佐野川流域の場合></p> <p><アンサンブル降雨予測算定位置と流域の関係について(イメージ)></p>																																																																																																																